

## よそから来た神とよそから来た病

—トーマス・マンの『ヴェニスに死す』におけるコレラについて—

Der fremde Gott und die fremde Krankheit  
—Die Cholera in *Der Tod in Venedig* von Thomas Mann—

千 田 ま や  
CHIDA Maya

2003年10月10日受理

### はじめに

2000年8月、スイスの保養地ダヴォスにおいて「世紀転換期（1890-1914）の文学と病。ヨーロッパ的コンテクストにおけるトーマス・マン。トーマス・マンの初期作品に関する講演とゼミナール」という題でシンポジウムが開かれ、その成果が2002年、トーマス・マン研究叢書（Thomas-Mann-Studien）第26巻として刊行された<sup>(1)</sup>。そこに収められた11の論考では、開催地ダヴォスがサナトリウム小説『魔の山』の舞台であるためか、結核をテーマにしたものが最も多く、神経衰弱とチフスが、それにつぐ。しかし、梅毒とコレラへの言及はごくわずかである。梅毒は後期の長編『ファウストゥス博士』（1947）の主人公の病であるからまだしも、コレラは『ヴェニスに死す』（1912）の主人公グスタフ・アッシェンバッハの死因であり、本来ならば結核と同等の扱いを受けてしかるべきである。本論では、従来のマン研究においてあまり注目されてこなかったこのコレラという病が、小説においてどのような役割を果たしているかについて考察する。

### 第一章

#### 1. 結核とコレラ

結核とコレラは、ともに19世紀末にコッホによって病原菌が発見された死の病であるが<sup>(2)</sup>、病のイメージとしては、対極に位置づけられる。スーザン・ソントグは『隠喩としての病』の中で次のように述べている。

『ヴェニスに死す』においては、アッシェンバッハを独自の存在としていたもの…その理性、克己心、潔癖さのすべてを情熱が瓦解せしめる。そして病気が追い討ちをかける。この物語の結末では、アッシェンバッハもコレラの犠牲者の一人に過ぎなくなり、そのとき、ヴェニスの多くの人々を苦しめているこの病気に屈することで、とどめの墮落がくる。『魔の山』において、ハンス・カストルプが結核だとわかったときには、一種の昇格があった。結核はハンスの独自性を強化し、彼をそれ以前より確かに一回

り知的な存在とせずにはおかない。一方の小説では病気（コレラ）とは秘密の愛に対する罰であり、他方では病気（結核）とはその表出である。今にして思えば、コレラとは、複雑な自我を単純化して、病める環境に還元してしまう負の災禍であって、人間を個性化し、背景の環境から浮かび上がらせる病気とは、結核の方なのである<sup>(3)</sup>。

（強調：千田）

ソクタグのこの解釈の問題点については後で論じるとして、ここでは「結核=昇格」「コレラ=墮落」という対比に注目したい。シンポジウムの発表者の中でも、インゲ・イェンスが19世紀の病のイメージとして、結核、コレラ、チフス、梅毒をそれぞれ「高貴な、繊細にする病」「庶民的（*plebejisch*）な病」「突然命を奪う病」「天才にする病」と性格づけている。<sup>(4)</sup> この対比は何に由来するのであろうか。『ヴェニスに死す』におけるコレラについて論じる前に、コレラという病の特徴と社会的位置づけをみておこう。

## 2. コレラとヨーロッパ<sup>(5)</sup>

紀元前11世紀の記録が聖書に残り、6世紀にヨーロッパに伝播、11世紀の十字軍による流行、14世紀のクリミア半島経由でのヨーロッパ大流行など、長い歴史を持つペストと比べると、パンデミック（世界的流行病）としてのコレラの歴史は浅く、1817年以降のことである。1866年、コレラの起源はインドのガンジス・デルタであると確認された。コレラはもともとこの地の風土病であったが、イギリスによるインド支配の確立と交通網の整備、そして巡礼と軍隊の移動によって、インド全

域に広まり、19世紀に5回にわたって世界的規模で流行した。インド駐留のイギリス軍が、1840年のアヘン戦争に参加して中国に伝え、1854年のクリミア戦争では北フランスのコレラをフランス軍がトルコ、バルカン半島に持ち込み、日本にも日清戦争の後、帰還兵が大陸から本土にコレラ菌を持ち帰ったことからわかるように、コレラは人とともに移動する病であり、コレラのパンデミック化は、19世紀帝国主義の植民地支配や戦争と不可分の関係にある。1831年の流行の際、オスマントルコやエジプトでは、西欧列強諸国の指導のもとに検疫や隔離が行われた。ペストを経験した西欧諸国は、公衆衛生制度において中東諸国よりも優位に立ち、医療を植民地支配の道具として利用した。その結果、コレラは、西欧と中東・アジア諸国の間、あるいは、公衆衛生制度の整った地域に住む上流階級とスラムの下層階級や移民の間の、不平等で差別的な関係において、常に差別される側と結び付けられ、蔑視の根拠とされる病となったのである。

丹治愛は、ブラム・ストーカー作『吸血鬼ドラキュラ』（1897）のドラキュラ像に、東欧からのユダヤ人移民と、彼らが運んできたとみなされたコレラへの恐怖が投影されているとみる<sup>(6)</sup>。柿本昭人によれば、このユダヤ人たちは、1892年にロシアから追放され、東欧を経て、ハンブルクからイギリスやアメリカに移住していった人々である<sup>(7)</sup>。1888年のハンブルクのドイツ関税同盟加入に伴う大量の移民の流入と、1890年以降の不況に加えて、1892年のコレラ流行は、反ユダヤ感情をさらにおおる要因となったのだが、このことから、コレラが「差別される病」であることが伺える。

1883年、ローベルト・コッホがアジア型コレラ菌を発見、20世紀に入るとコレラの犠牲者の数は減ったが、根絶されぬまま現在に至っている。トーマス・マン自身、二度もコレラが発生した町に居合わせている。1905年、バルト海沿岸のザポット（Zappot）と、1911年のヴェニスである。<sup>(8)</sup> また、『ヴェニスに死す』執筆に使われた新聞記事は1911年9月のパレルモでのコレラ流行を報じている<sup>(9)</sup>。

執筆資料としては、このほかに、「アジア型コレラ」という見出しのブロックハウス百科辞典（Brockhaus' Konversations Lexikon）第14版からの抜書きがある<sup>(10)</sup>。そこには、コレラがインドの風土病であったこと、中国、ペルシア、アフガニスタン、モスクワを経て1831年、はじめてドイツに入ったこと、翌年にはイギリス、フランスに伝わり、移民船によってアメリカに持ち込まれたこと、1865-75年に、それまでの陸路ではなく海路でアラビアから数日のうちにヨーロッパ全域に広がったこと、1884年にはフランス船によりインドからマルセイユ、イタリアを経てスペインへと広がり、1892年には、ペルシアからロシアを経てハンブルク、フランス、ベルギーに伝わったこと、原因は飲料水の汚染で、夏の終わりにもっとも猛威をふるう「貧者の病」であることが記されている。

この記述においては、アメリカは移民船の目的地として、また、ハンブルクはコレラの終着点としてしか言及されていないが、柿本によれば、当時のアメリカ人の間で、ハンブルクは「不潔な都市」「望ましくない移民がアメリカに向けて乗船する港町」として知られていたという<sup>(11)</sup>。つまり、この記述においては巧妙にぼかされているが、当時のハンブルクは、移民とコレラを輸出する都市として、

イギリス人やアメリカ人の蔑視の対象となっていたのである。資料収集の段階で、コレラに襲われた都市として、故郷リューベックに近いハンブルクがマンの念頭にあったことは間違いない。なぜならマンは、ハンブルクのコレラ流行の際、約16000人のうち約8600人が死亡したこと、これをきっかけに衛生施設が設けられ、家屋が建て替えられたこと、同じ年ヴェニスでもコレラ対策として患者と船の隔離が行われたことまで調べているからである<sup>(12)</sup>。従来のマン研究では見過ごされてきたが、『魔の山』の主人公ハンス・カストルプの故郷は、湿気の多い港湾都市である点でもヴェニスと共通する、コレラと縁の深い町だったのである。

それでは小説の舞台は、なぜハンブルクではなくヴェニスでなければならなかったのか。それはやはりコレラが、差別される側の病として位置づけられていたからであろう。ハンブルクをコレラを輸出する「不潔な都市」として蔑視したアメリカやイギリスと同じ視線を、小説において語り手は落ちぶれた観光都市ヴェニスに向けている。コレラ発生的事实を隠蔽しようとする観光業者、汚染された果物や野菜、よどんだ空気と水が発する異臭といったヴェニスの裏町の描写には、ペストもコレラもともに空気と水の腐敗が原因とされていた時代の「疫病」のイメージと、コレラ菌の発生源となったガンジス・デルタの湿地のイメージの両方が重ねあわされている。この小説においてヴェニスは、「西欧対アジア」という構図の「アジア」の位置に置かれている。したがって、ヴェニスでコレラに罹って死ぬアッシェンバッハは、場所の点でも病気の点でも二重の蔑視の対象として、「とどめの墮落」（ソントグ）を遂げるのである。

## 第二章 コレラとディオニュソス

マンのコレラに関する抜書きには、「ハンブルクをコレラの中継地点としてあえて語らない」という点とともに、もう一つ注目すべき特徴がある。それは、「コレラの擬人化」である。

コレラの伝染経路の説明には、「広がり、さまよう傾向を示す (Neigung zur Ausbreitung und Wanderung zeigen)」「広がる (sich ausdehnen, sich verbreiten)」「くまなく移動する (durchwandern)」「迫る (dringen, vordringen)」「行き着く (erreichen, gelangen)」「現れる (auftreten)」などの表現が使われている<sup>(13)</sup>。マンはこの抜書きを一部小説に利用しているが、その際、「襲う (übergreifen)」「姿を現す (auftauchen)」「頭を上げる (sein Haupt erheben)」「面を見せる (sine Maske zeigen)」「動こうとしない (nicht mehr weichen zu wollen)」という具合に擬人的表現をさらに強調した<sup>(14)</sup>。しかし、擬人化は資料の抜書きにもすでに認められる傾向なのである。

もちろん、小説における「コレラの擬人化」には、ディオニュソス神との関連付けという、小説構成上の必要性が作用していることは言うまでもない。小説において、コレラとディオニュソスは、1. インド起源であること、2. さまよう (wandern) 性質を持つこと、3. 荒々しい (wild) 性質を持つこと、4. よそからやってくる (fremd) 存在であること、という共通点をもつものとして描かれている。この4点についてもう少しくわしくみてみよう。

### 1. インド起源

コレラがガンジス・デルタの風土病であっ

たことは既に述べた。一方、ディオニュソス神の起源は実はインドではないのだが<sup>(15)</sup>、マンはフリードリヒ・ネッセルトの『女学生と教養ある婦女子のためのギリシア・ローマ神話教本』とニーチェの『悲劇の誕生』にならって、インドからギリシアに移動した神と見なしている。ネッセルトは、ディオニュソスがライオンと虎と大山猫と豹に引かれた車に乗っているとし<sup>(16)</sup>、ニーチェは、ディオニュソスの供をつとめる動物として虎と豹を挙げているのだが<sup>(17)</sup>、ミュンヘンとヴェニスでアッシェンバッハの脳裏に浮かんだガンジス・デルタの風景にも虎が登場する。

Er sah eine Landschaft, ein tropisches Sumpfbgebiet unter dickdunstigem Himmel, feucht, üppig und ungeheuer, eine Art Urweltwildnis aus Inseln, Morästen und Schlamm führenden Wasserarmen (...) sah (...) zwischen den knotigen Rohstämmen des Bambusdickichts die Lichter eines kauern den Tigers funkeln. (562)

彼には、もやのたちこめた空の下に、湿って、草木の繁茂した、異様な熱帯の沼地が見えた、小島と泥沼と、泥を流していく水流とに織り成された原始風景が見えた。(中略) 節の多い幹のたてこんだ竹やぶの間からは身をかがめた虎の目が光っているのが見えた。(強調：千田)

ガンジス・デルタとディオニュソスの両方にかかわりを持つ獣である虎が、ヨーロッパ人が抱くインドのイメージといかに深く結びついていたかは、コレラ菌発見者コッホが記した調査報告からも伺うことができる。

インド国内でもコレラが毎年猛威をふるっているのは、ガンジス河のデルタ地帯だけである。(中略) ここでガンジス河とブラマプトラ川の雄大な流れは、迷路のような水路のなかに姿を消してゆく。(中略) この無人地帯は植物と動物のまさしく宝庫である。この地域に人間が住まない理由は、洪水がおこり、虎が棲んでいるからということだけではない。そこに短期間いるだけで、ほとんど誰もが悪性の熱病にかかるのがその主な理由である<sup>(18)</sup>。(強調：千田)

## 2. さまよう (wandern) 性質

コレラの伝染に用いられた表現だが、移動する神ディオニュソスにふさわしい。

## 3. 荒々しい (wild) 性質

見市雅俊が紹介しているコレラ患者の観察記録は、死亡率の高さとともに、その症状の激しさを伝えている。

コレラの発作は普通下痢から始まった。(中略) つぎが痙攣。手足のつま先から始まり、皮膚の表面が硬直し、瘤状になる。激痛を伴うこともあり、患者は悲鳴をあげる。(中略) 神経全体が興奮状態になり、気分が昂ぶり、錯乱状態に陥ることもある。(中略) 皮膚が死人のように冷たくなり、唇が紫色に変色し、目が陥没し、どぎつく、獐猛で恐怖に満ちた人相になる。形相が完全に変わり、知人でも見分けがつかなくなる<sup>(19)</sup>。

マンのディオニュソスに関する抜書きには次

のような一節がある。

その正体は半分よそ者 (halbfremd) である神が、ギリシアの豊穡の神の仮面をかぶって振舞っている。「苦しむ」(死して再びよみがえった) 神、激しい嘆きと歓呼の声の中で崇められるこの神が姿を見せる際、小アジア、トラキアやフィリギアでは、特に荒々しい (wild) 熱狂的な (rauschend) ふるまいがみられる。<sup>(20)</sup>

## 4. よそ者 (fremd)

マンの覚書には、ディオニュソスが「よそ者の神、よそから力づくで入り込んでくる神 (ein Fremder, von draußen gewaltsam Eindringender)」であると記されている<sup>(21)</sup>。主人公は、ヴェニスでコレラが流行している事実をを旅行代理店で確かめた日の夜、「よそ者の (fremd) の神の荒々しい (wild) 夢」を見る。

” Der fremde Gott! “ (...) in zerrissenem Licht, von bewaldeter Höhe, zwischen Stämmen und moosigen Felstrümmern wälzte es sich und stürzte wirbelnd herab: Menschen, Tiere, ein Schwarm, eine tobende Rotte, — und überschwemmte die Halde mit Leibern, Flammen, Tumult und taumelndem Rundtanz. (...) Und die Begeisterten heulten den Ruf aus weichen Mitlauten und gezogenem u- Ruf am Ende, süß und wild zugleich wie kein jemals erhörter: (...) seine Seele begehrte, sich anzuschließen dem Reigen des Gottes. Das obszöne Symbol, riesig, aus Holz, ward enthüllt und

erhöht: da heulten sie zögelloser die Losung. Schaum vor den Lippen, tobten sie, reizten einander mit geilen Gebärden und buhlenden Händen, lachend und ächzend, stießen die Stachelstäbe einander ins Fleisch und leckten das Blut von den Gliedern. Aber mit ihnen, mit ihnen war der Träumende nun und dem fremden Gotte gehörig. Ja, sie waren er selbst (...) Und seine Seele kostete Unzucht und Raserei des Unterganges. (633)

「よそ者の神だ！」(中略) 途切れ途切れの光の中を、森で覆われた高みから、木々の幹と、苔の生えた岩との間を、人間が、動物が、何者かの集団が、荒れ狂う群集がころびつつ、渦をまきつつ、どっとなだれ落ちてきた、そして山腹は肉体と火炎と狂乱と、そしてよろめく輪舞で氾濫した。(中略) そしてこれら熱狂する人間の群れは、やわらかな子音の、終わりのUの音を長く引く呼び声をほえるように響かせていた。この呼び声は、かつて聞いたことのあるどんな呼び声よりも甘く、しかも荒々しい響きを持っていた。(中略) 彼の魂はなんとかしてこの神の輪舞に加わりたくらいと願ひ、木で出来た巨大な淫らな陽物の象徴が現れて、高々と差し上げられ、群集がまたますます放埒に合言葉を絶叫し、口から泡を吹き、荒れ狂い、淫猥な身振りといやらしい手で互いにつつきあい、笑いつつ、あえぎつつ、とげのついた棒で互いに肉を刺し合って、手足から流れる血をすすりあう時、夢見る男はいまや彼らとともに、彼らの中であって、よそ者の神のものとなってしまった。いや、この群集こそ彼自身だったのだ。(中略) 彼の魂は没落の不倫と狂気を味わいつ

くした。

ディオニュソスの別名「よそ者の神 (der fremde Gott)」の出典についてT. J. リードは「不明」としているが<sup>(21)</sup>、ザントベルクは、ブルクハルトの『ギリシア文化史』(1898)を挙げている<sup>(22)</sup>。彼は、死の病とこの神との関係について、どちらも「アジア (インド東部)」からやってきたこと、この神に従う者たちも、コレラに罹った者も、「尊厳を完全に失った」状態になることから、ディオニュソスとコレラとの結びつきは、マンにとって「自明のことであった」とする。

作者は、神話的な物語のレベルにおいて、「よそ者の神」にアッシェンバッハを罰する役割を与えている。(中略) テキストの現実のレベルにおいては、アッシェンバッハはコレラに倒れるという設定にしている<sup>(23)</sup>。

コレラをデュオニュソスの罰である、と断定することには問題があるが、ディオニュソスとコレラがそれぞれ神話的レヴェルと現実レヴェルで対応しているという彼の見方は、マン研究者の共通理解であると言ってよいであろう。マンフレート・ディールクスもマンの小説技法についてこう語る。

この小説は、構成上複数のレベルで物語られている。現代の時空間の現実の出来事が、時空を超えた神話的な類型と関連づけられている<sup>(24)</sup>。

ディールクスはさらに、その「神話的類型」をフロイトのいう「抑圧されたもの」とみなし、神話的レヴェルのディオニュソスは心理

学のレベルでも解釈可能である、とする<sup>(25)</sup>。

しかし、定説のようにコレラを単純に「現実の出来事」として片付けてよいものだろうか。ソントグの表現を借りるなら、コレラもまた「隠喩としての病」ではないのか。マンの作品における結核やチフスがそうであったように<sup>(26)</sup>、コレラもまたコレラ菌による症状にとどまらぬ象徴的な意味を帯びているのではないだろうか。コレラは差別的な病であることは既に述べた。百科事典の記述、ハンブルクではなくヴェニスという設定、マン研究者の見解、これらすべてに共通するのは、この疫病を、あくまでも「外からやってくる」（柿木）病と見なそうとする心理が働いているということである。だが、そもそも、「外」とはどこを指すのだろうか。ヨーロッパから見たインドは「外」である。ではヴェニスはどうか。ハンブルクと比べればヴェニスは「外」だが、インドと比べれば「内」ではないのか。「外」と「内」の境界線を引くfremdという言葉は、小説の中でどのように使われているのか、あらためて読み直す必要があるだろう。

### 第3章 fremdという言葉

小説第一章において、ミュンヘンのアッシェンバッハの前に現れるのが、「遠方からやってきた（weitherkommend）」らしい「外国人風の（fremdländisch）」（560）男である。「荒々しいもの（Wildes）」を感じさせ「旅人らしさ（das Wandererhafte）」を帯びた態度の「外国人（der Fremde）」（561）が、ヘルメスとディオニュソスの特徴を帯びていることは改めて言うまでもない。彼と出会った直後、アッシェンバッハはガンジス・デルタの風景を幻視する。そして、それまで「健康維持のための習慣」と

して山の別荘で過ごした経験しかなかった彼が、不意に「創作という義務」（563）から逃れたいという気持ちになり、「虎のもとへとは言わないまでも、南へ」（564）旅立つ決心をする。この場面でのfremdという言葉は、名声を得た小説家としての彼の日常世界から発せられ、仕事に対する暇、山に対する海、北に対する南を指す語として使われている。

第二章では、主人公の生い立ちが語られるが、プロイセンの司法官である父に対置されるボヘミアの楽団長の娘であった母に、「よそ者の血統」（die fremde Rasse）（565）という表現が使われている。ヴェニスで没したマラーが主人公のモデルであることから、この表現は、主人公がユダヤ系であることを暗示していると解釈できるだろう。ここでも北と南が対比されている。

第三章で、ミュンヘンを出て、まずアドリア海の島ポーラに滞在した主人公は、「地元民（Landesvolk）」の「荒々しい意味不明の（wildfremd）」おしゃべりを耳にする。（573）貴族の称号を持つ主人公の、民衆（Volk）に対する差別感情を示唆する表現である。彼はそこからヴェニスに移動するのだが、船の中で「夢見るような違和感（eine träumerische Entfremdung）」に襲われ、「世界が奇妙なものにかわった」ように感じる。彼は時間の感覚を失い、夢うつつの中で、船に乗っている怪しげな水夫や乗客を見て「わけのわからない夢の言葉を話す影のような奇妙な姿の者たち」だと思ふ。（576）第一章のミュンヘンやポーラでの彼とは異なり、ヴェニス行きの船の上の彼は、日常的常識的な判断力を失っている。この場面で水夫や乗客が奇妙に思われるのは、彼らではなく彼自身が日常世界から離れた「よそ者」になったためだと解釈でき

る。つまり、単にドイツとイタリアが対比されているだけではなく、日常と非日常、現実と神話が対比され、後者の側に移りつつある、あるいはもう移ってしまった主人公には、前者が自明のものと感じられなくなってしまったと解釈できるのである。

船からゴンドラに乗り換えた彼は、ゴンドラの船頭の顔を見て、彼が「イタリア人ではない」ことに「違和感 (Befremdung)」(50) を覚える。ミュンヘンで見かけた外国人と同じくディオニュソスとヘルメスの特徴を持ち、ヴェニスでカーロンの役をつとめているこの男は、ミュンヘンでもヴェニスでも「よそ者」である。アッセンバッハは虎の潜むインドにこそ行かなかったが、インドからの迎えがヴェニスまでやってきたことの暗示であろうか。いや、ヴェニスの「耐え難い湿気」と「海と沼の腐ったようなにおい」(59)は、ミュンヘンで彼の脳裏に浮かんだインドの風景と、彼が選んだヴェニスとの区別をあいまいにする。ミュンヘンとヴェニスで彼が見知らぬ男に感じた同じ違和感は、デュオニュソスに導かれた彼が、間違いなく目的地に着いたことの証しともとれるのである。

それでもヴェニス到着直後の時点では、まだ主人公に「町が彼を病気にした」(596) という自覚を持つだけの判断力と、ヴェニスを立ち去るだけの決断力が残っていた。しかし荷物の手違いで滞在の延長を余儀なくされ、一度は去る決意をした場所に舞い戻り、少年への愛の自覚した時、彼はもう二度とそこから逃げ出すことができなくなっていた。

第四章で、これまで、「享樂を好まず」、「自分の日常の高貴な労苦の中へ、神聖で味気ない奉仕生活の中へ帰りたくなる」のが常であったはずの彼を、「この土地に限って、魅了

し、彼の意欲を弛緩させ、彼を幸福にした。』

(603) 彼は毎日少年を観察し、「かくも高められ、かくも自由に自己を表現する肉体の、あらゆる線、あらゆるポーズを知悉し、もう知り尽くした美しさに新たに出会うたびにうれしくそれを歓迎し、感嘆し、やさしく味わいつくして飽きなかった。」(605) 少年の姿をながめ、少年の声を聞きながら彼が書いた散文は、「その至純、その高貴、その張りつめた感情の弦で、必ずや程なく多数の人々の驚嘆を招かずにはおかぬものであった。」(608) 彼は、美しい青年パイドロスに語りかけるソクラテスの言葉をつぶやく。「愛するものは愛される者よりも一層神に近い、なぜなら愛される者の中に神はいないのに、愛する者の中には神がいるのだから。」(607) しかし、ソクラテスを気取る彼が、現実には、少年の後をつけ、少年に声をかけようとして取り乱し、その場を走り去る。「やられた。あの愛らしい少年を見て、われわれの勇気をくじき、誇らしい精神をかくも無残にたたき伏せるのは確かにあの神なのだ。」(610) この章では、羞恥心を忘れて少年を追いかけながら、いざとなると声をかける勇気さえない老人の哀れで滑稽な姿と、神話と哲学で飾られた誇り高い彼の認識とが、大きな落差を示しつつも、どちらに傾くでもなくバランスを取っている。少年が本当に神なのか、それとも、それは老いらくの恋に狂った作家の単なる思い込みにすぎないのか、神話的世界と現実世界がお互いに支えあうこの小説では、どちらにも解釈できる仕掛けになっているのである。

第五章で、少年の一行を追って町を歩き回るようになった彼は、消毒薬のにおいと「牡蠣や貝を食べないように」という掲示に気づく。



Volksgruppen standen schweigsam auf  
Brücken und Plätzen beisammen; und der  
Fremde stand spürend und grübelnd unter  
ihnen. (615)

地元民が黙りがちにたむろしていた。そしてよそ者は、様子を探るような、物思いに沈むような様子で彼らの間に立っていた。  
(強調：千田)

ここでは地元民 (Volk) に「よそ者」という言葉が対置されて使われている。第3章で、それまで、「ヴェニスにいと病気になるてしまふ」という不安は主人公個人のものであったが、ここに至って町全体がコレラに汚染されていることが暗示される。町の人々はそれを知っていながら、「よそ者」のアッシェンバッハに対して口をつぐむのである。コレラ発生という現実的の事件が、アッシェンバッハの意識の中で神話的あるいは心理的な曖昧さを伴って使われていた「よそ者」という言葉を、「地元民からみた観光客」という一般的な用法に引き戻した。同時に、少年のあとを追う彼の心の冒険が、コレラ感染の危険を冒しつつヴェニスの路地を徘徊するという、現実にも命がけの冒険でもあることが明らかになる。

ある晩ホテルの庭で演奏した音楽一座の中に、ミュンヘンの旅人や船頭に似た赤毛のギター弾きがいた。彼は消毒液のにおいを漂わせ、「ヴェニス人のタイプではない」(623) 「よそ者の雰囲気 (das Fremdartige)」を持っていた。アッシェンバッハは彼にコレラのことを尋ねるが、はぐらかされる。しかし旅行代理店で、「不信感を抱いたよそ者のような顔をして (mit der Miene des mißtrauischen

Fremden)」、(627) 誠実なイギリス人職員からコレラのことを聞き出すことに成功する。この表現からは、その前からアッシェンバッハがコレラの発生を確信していたことがわかる。「地元民 (das Volk) は知っていた」が、「よそ者」には伏せられてきたこの事実を知っている彼は、もはや「よそ者」とは言えない。そのうえ彼は一度は少年とその家族に危険を警告し、「沼地」ヴェニスを脱出しようとするが、思い直して沈黙を守り、それまでと同じように冒険を続ける。こうなると彼は、狡さの点でも地元民に劣らぬ共犯者になったと言わざるを得ない。そしてその夜、彼は夢の中で、「よそ者の神」を讃える半狂乱の者たちに混じった自分のあさましい姿を見るのである。

「よそからきた (fremd)」という表現を拾いながら小説の筋を追ってきたが、結論として言えるのは、第一に、この語の使われ方は一様ではなく、地理的、神話的、現実的、心理的と、さまざまなレベルで用いられているということ、第二に、しかしいずれも主人公アッシェンバッハの位置を指し示す重要な手がかりになっていること、第三に、境界線をはさんだ二つの領域の間の上下関係を示唆していることである。第一の結論について具体例を挙げるなら、地理的なレベルでは、北と南 (ドイツとイタリア、プロイセンとボヘミア)、西と東 (ヨーロッパとインド)、神話的なレベルでは、ヘルメスと、ディオニソス、カーロン、現実的なレベルでは、ミュンヘンの住民と旅行者、観光客と観光地ヴェニスの地元民、心理的レベルでは、日常の世界を生きる者と非日常の世界を生きる者、貴族の称号を持ち、義務としての仕事に忠実な名士と、名声も威厳も捨てて愛する少年を追いか

ける詩人である。アッシェンバッハは筋が展開していくにつれて、次第に上に挙げた2つの領域を前者から後者へと移動していく。しかも、その前者から後者への移動は、前者の観点に立った場合、上から下へ、差別する側から差別される側への移動であり、主人公は、最終的に、すべてのレベルにおいて差別される側に移った時点で屈辱の死を遂げるのである。

ただし、fremdという言葉は、それをを用いる側の主観と切り離すことが出来ない。この語によって引かれる境界線は、「内」と「外」を仕切り、「内」を基準として「外」を見下す。したがって、語り手を含め、この言葉を用いる人物が、境界線をまたいで移動した場合、「内」が「外」に、「外」が「内」になり、上下関係が逆転することもありうる。

ミュンヘンに出現した旅行者、もぐりのゴンドラの船頭、音楽一座のギター弾きといった怪しげな風体でアッシェンバッハを導く「よそ者」が、実は彼を魅了した美少年と同じ「神」(ディオニュソス・ヘルメス)であるという仕掛け、あるいは、「愛される者よりも、愛する者の方にこそ神は宿る」(本文52)というソクラテスの言葉は、なるほど主人公はヴェニスの不潔な裏町でコレラに感染して命を落とすという「とどめの墮落」を遂げたが、同時にそれによって「神」に導かれ、「神」になり、美と形式の奥義を悟った芸術家に「昇格」を遂げたという解釈をも可能にする。小説の最後の場面を見てみよう。

Sein Haupt war an der Lehne des Stuhles langsam der Bewegung des drau ßen Schreitenden gefolgt ; nun hob es sich, gleichsam dem Blicke entgegen, und sank auf

die Brust, so da ß seine Augen von unten sahen, indes sein Antlitz den schlaffen, innig versunkenen Ausdruck tiefen Schlummers zeigte. Ihm war aber, als ob der bleiche und liebliche Psychagog dort drau ßen ihm lächle, ihm winke ; als ob er, die Hand aus der Hüfte lösend, hinausdeute, voranschwebe ins Verheißungsvoll- Ungeheure. Und, wie so oft, machte er sich auf, ihm zu folgen. (641)

彼の頭は、腰掛の背もたれにあずけられたまま、ゆっくりと向こうの方を歩む者の動きを追っていたが、一時、相手のまなざしに応えるかのように背もたれを離れ、そしてまた胸の上に沈みこんだ、そのため彼は上目遣いになったが、顔は、深い眠りの、ぐったりとした、昏々とわれを忘れていた表情を示していた。けれども彼自身は、向こうにいる青白い愛らしい魂の導き手が自分に微笑みかけ、合図しているような気がしていた。少年が、腰から手を離しながら遠くの方を指し示して、希望にあふれた、際限のない世界の中に漂い浮かんでいるような気がしていた。そして彼はいつもと同じように立ち上がって少年のあとを追おうとした。

「とどめの墮落」を遂げたアッシェンバッハが息を引き取る直前に見た世界は、夢の中で彼が見た喧騒と狂乱のディオニュソスの世界とは対照的な、美少年ヘルメスが招く静謐な彼岸の世界であった。デュオニュソスの夢の中では、彼はおのれの「没落」を自覚していたが、死を迎える彼の意識にもはやその自覚はない。むしろ彼の魂は、希望に満ちている。

そして、皮肉なことに、世間も彼の「墮落」には気づかず、彼の死をうやうやしく悼むのである。

「よそから来た (fremd)」という言葉に潜む差別意識が、「よそ者の (fremd) の」神によって覆される。「沼地」と呼ばれたヴェニスの誘惑に屈し、名士の仮面を捨てたアッシェンバッハが、芸術家として己の運命を全うし、「沼地」ハンブルクからダヴォスの山に登ったハンス・カストルプが冥府のヴィーナスに誘惑される。ソントグは「コレラ=墮落」「結核=昇格」というテーゼを立てたが、彼女が見落とした、fremdという言葉に込められた逆転の仕掛けにこそ、マン独特の機知が働いているのである。

## 結論

従来のマン研究は、『ヴェニスに死す』における「コレラ」を、神話的世界を裏打ちする現実レベルでの設定としかみなしてこなかった。だが「コレラ」は、『魔の山』における「結核」、『ブデンブローク家の人々』における「チフス」同様、単なる現実的設定ではない。「外からやってくる (fremd)」病と見なされ、アジア、不衛生な地区、差別される移民と結びつけられてきたこの病は、主人公の死に、「墮落」「屈辱」の意味合いを与える。しかし、その一方で、「よそ者の (fremd)」という形容詞で神デュオニユソスと結びつけられることにより、アッシェンバッハのコレラによる死は、芸術家としての「昇格」と見なすことも可能となっている。Fremdという語が帯びている差別意識が、主観性の強さとして働き、この語によって隔てられる「内」と「外」の上下関係が、話者の位置の移動と

もに逆転する。少年を尾行してコレラにかかったアッシェンバッハは、市民的観点から見れば「墮落」したが、美と形式の世界に隠された陶醉の世界に通じることで、芸術家としては「昇格」した。このように、fremdという言葉は、神話的レベルと現実的レベルの接点にあって、「墮落」を「昇格」に、「昇格」を「墮落」にダイナミックに転換する形容詞として、対比と多義性に富むマンの小説世界を支えているのであり、fremdな病コレラもまた、現実的な病にとどまらず、「市民的墮落」と「芸術家としての昇格」の両義性を帯びているのである。

## 註

トーマス・マンの『ヴェニスに死す』のテキストは、以下のものを使用し、頁数を本文中の括弧内に示した。

Thomas Mann: *Der Tod in Venedig*. In: *Frühe Erzählungen. Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. v. Peter de Mendelssohn. F (a) M 1981.

このフランクフルト版は、文芸誌『ノイエ・ルントschau (Die Neue Rundschau)』1912年10・11月号に掲載された版に従っており、同年ヒュペリオン (Hyperion) 社から出た版 (Buchausgabe) とは若干の異同がある。異同の詳細については、

T. J. Reed: *Thomas Mann Der Tod in Venedig Text, Materialien, Kommentar*. München/Wien 1983. S. 83-84を参照されたい。

小説からの引用を訳すにあたり、新潮社版トーマス・マン全集第8巻 (1971) 所収の高橋義孝訳を参照した。

(1) *Literatur und Krankheit im Fin-de-siècle (1890—1914)*. Die Davoser Literaturtage 2000.

- Hrsg. v. Thomas Sprecher. Thomasn-Mann-Studien Bd. 26. F (a) M 2002.
- (2) ローベルト・コッホ (Robert Koch) が結核菌を発見したのは1882年、コレラ菌を発見したのは1883年のことである。
- (3) スーザン・ソントグ『隠喩としての病』(みすず書房 1982) 55-56頁。
- (4) Inge Jens: Thomas Mann. Auszeichnung durch Krankheit. In: Thomas-Mann-Studien Bd. 26. S. 236.
- (5) コレラの歴史と社会的位置づけについては、以下の文献を参照した。  
見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社 1994)  
柿本昭人『健康と病のエピステーメー——十九世紀コレラ流行と近代社会システム』(ミネルヴァ書房 1991)
- (6) 丹治愛『ドラキュラの世紀末 ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』(東京大学出版会 1997)。
- (7) 柿本昭人 前掲書 42頁。
- (8) Werner Frizen: Der "Drei-Zeilen-Plan" Thomas Manns. Zur Vorgeschichte von *Der Tod in Venedig*. In: Thomas-Mann-Jahrbuch Bd. 5. F (a) M 1992. S. 138.
- (9) Reed, S. 119.
- (10) Reed, S. 107f. リードは出典を明記していない。百科事典の特定はハンス・ヨアヒム・ザントベルクによる。
- Hans-Joachim Sandberg: Der fremde Gott und die Cholera. In: Thomas Mann und seine Quellen. Hrsg. v. Eckhard Heftrich und Helmut Koopmann. F (a) M 1991. S. 106, Anm. 150.
- (11) 柿本昭人 前掲書 81-82頁。
- (12) Reed, S. 112f.
- (13) Manfred Dierks: Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann. In: Thomas-Mann-Studien Bd. 2. Bern/München 1972. S. 29.
- (14) Reed, S. 94.
- (15) ギリシア語で「よそ者」を意味するクセノス (Xenos) の神話学上の解釈については、マルセル・トゥティエンヌ『ディオニュソス——大空の下を行く神』(法政大学出版局 1992) 11-17頁を参照のこと。
- (16) Friedrich Nietzsche: Die Geburt der Tragödie. In: Werke in drei Bänden. Hrsg. v. Karl Schlechta. Bd. 1. Darmstadt 1982. S. 24.
- (17) 見市雅俊 前掲書 100頁。
- (18) 同上 16-17頁。
- (19) Reed, a. a. O. S. 94.
- (20) Reed, S. 95.
- (21) Reed, S. 121.
- (22) Sandberg, S. 76.
- (23) Sandberg, S. 107.
- (24) Manfred Dierks: Traumzeit und Verdichtung. Der Einfluß der Psychoanalyse auf Thomas Manns Erzählebene. In: Thomas Mann und seine Quellen. S. 111.
- (25) Dierks, a. a. O. S. 121.
- (26) クリステリアン・グラウヴェによれば、『ブデンブローク家の人々』のチフスの描写もブロックハウス百科事典第14版に基づく。19世紀末、チフスは神経の病と見なされていた。ディールクスはチフスと、当時流布した「神経衰弱 (Neurasthenie)」との関連を指摘している。
- Christian Grawe: Eine Art von höheren Abschreiben. In: Thomas-Mann-Jahrbuch Bd. 5. F (a) M 1992. S. 119.
- Manfred Dierks: Buddenbrooks als europäischer Nervenroman. In: Thomas-Mann-Jahrbuch Bd. 15. F (a) M 2002. S. 143.